
天使の慟哭

月詩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使の慟哭

【Nコード】

N1334J

【作者名】

月詩

【あらすじ】

世界には天使がいる。記憶を失った僕がその日出逢った人も天使だった。

第一章 詩

彼女は美しい。

歩みを進める毎に咲き乱れる華々が、薄暗く空虚な路地を鮮やかに彩っていく。見るものがあるからこそ、美しさは意味を持つ。故にそれに意味などなかった。

そして、彼女もそうだった。

紅く染まってしまった、流れるような髪と辛うじて服とよべるだらう紅い布を纏っただけの女。それが彼女であった。

今にも消えそうな、蠟燭の炎に似た儂さを感じさせる寂れた街灯には、無数の虫が光を求めて群がっていた。

「あの月の方が綺麗なのに。」

立ち止まった彼女は空を見上げて一言だけ呟いた。気付いていないのか、知らないのか、諦めたのか。彼等にそれを理解する事は叶わないだろう。だとしたら彼等は幸せなのだ。抱いたのは卑下ではなく、羨望に近い感情。

私は月が綺麗に見えることを知っていた。それは太陽の光を受けて輝いているのだということ、月は薄汚い小さな存在でしかないことを、そして決して太陽にはなれないことも知っていた。

だからこそ、こんなにも愛おしい。

「似ているな、私達は。そうは思わないか？」

誰に、とではなく　いや、おそらく彼に対して私は問いかけた。答えはやはり返らない。それを知りつつ問うとは馬鹿げたことなのだろう。それでもいいのだ、多分彼は答えてくれたから。

彼女は少し笑って再び歩き出した。立ち止まってしまった自分が少しだけ嫌になった。振り返ることが出来なくなったからだ。元々振り返ることなんて一度もなかったが。

彼女が止まっていた跡には、紅い「月」があった。その中に、白く輝く月がせせら笑うかのように映っている。

『お前とは違うのだ。』

その模写された存在を喰らうかの如く、その血は暴れ出した。それが感情であるならば月の幻影でさえ犯してみせると、地面に広がっていた紅い血は、徐々に形を変えていった。

刹那、それが何かの形を成す前に空間を歪めて現れ、血へと突き立てられた白銀の剣は、その生なき命をただの液体へと回帰させた。持ち主のいない剣によって飛び散った液体が作る紅い花々が、灰色の周囲により美しく咲き誇る。花卉の一つ一つには純白の模様が映り込んでいた。

「だから月は嫌いなんだ。」

彼女は最後にそう呟いた。

第二章 思

僕の名を呼ぶ声がする。

僕は死んだ。はずだった。

理由は覚えていない。それほど昔だからという訳ではない。そもそも死そのものに時間という概念は存在しない。と思う。その死という状態にあるであろう自分に対しても同様にだ。多分どこかに置いてきたのだろう。今の自分には遠く離れた事に思われた。

繰り返し呼び掛ける声は、どこか暖かく、そして無表情でもあった。この声を僕は知っている。でも聞きたくはなかった。そんな気がしてならない。だから、僕はそれを聞こえない事にした。

この世に生を受ける前もおそらく此処にいたのだろう、などと無意味な事を考えている。確かに意識がどこかを浮遊していた。何も感じない。それは初めての感覚であった。快樂の形にはこんなのもあるのか。出来ることならこのまま、僕も無になろう。そう思っていた。

「まだ僕の名を呼ぶのか。」

紡ぎ出される誰かの名は、その言葉はもはや呪いだった。僕を痛いほど優しく締め付ける鎖。溶けてしまおうとする僕に、それでも形を与えようとすると詩の響き。尚も無の中に身を躰す僕の名を、繰り返し呼び続ける誰かに苛立ちが募っていた。ただその苛立ちがどこからくるのかさえ分からない。それはもしかしたら畏怖だったのかもしれない。この恐怖は不安定な精神状態ではなく、この声によって心を乱されたからであろう。このざわめきこそが生の鼓動なのだと気付いた時、僕は目を覚ました。

「翔!！」

依然とはつきりとしめない感覚と認識。だが、意識の混濁という状態においても、今自分が生きているのだという実感だけははつきりしていた。

また名が呼ばれた。そうだ、それは僕の名前だった。なぜわからなかったのだろうか。おかしな話だ。

眩しすぎる冷たい蛍光灯の光から庇うように、何かが僕の顔の前に現れた。

冷たい。

僕の顔に数滴の雫が落ちてきた。それが涙だとわかるのに時間はかからなかった。

「翔。」

噛みしめるかのように呼び掛けたその一言には、おそらく無数の感情が込められているのだろう。安堵、不安、喜び、悲哀。涙の一つ一つに詰まった思いは、僕の心には重すぎた。押しつぶされそうになって、耐えきれなくなつて、僕も泣き出した。

そんなんじゃ、顔がよく見えないよ。

まだ声がうまく出せなかった。それにまだ意識はしっかりしていないみたいだった。相手の顔が見えないのは、僕が泣いているせいなのに。少しだけ泣くのを我慢して、目を拭おうとした。やはり体は動かない。

その時目の前の人が僕の感情をすくい上げてくれた。いや、これはあなたの感情だ。僕はまだ何も感じていない。溢れ出したのは、穴の開いたコップに水が注がれても流れ落ちてしまふような、そんな思いだから。

「玲奈」

必死に口を動かし乾ききった喉を震わせ、流れ出た言葉がその名前だった。そしてそれは彼女の名前。見るものを吸い込んでしまうような黒髪を白い紐で束ね、男が着るような、黒一色のTシャツにジーンズという格好の彼女は僕の知っている彼女だった。

声を出すことで疲れきったのか、僕は再びゆっくりと瞼は重くなり、眠りへと、だが今度はまたすぐ会える別れに、僕は旅立った。

意識が再び落ちる直前に見た彼女の顔が酷く悲しそうな表情だったのが、僕の心に残る楔となった。その時にようやく気付くことができた。最初私を呼んだ声と、次に目が覚めたとき私を呼んだ声の主は違うということに。

それは僕の過ちだった。

第三章 始

事故だそうだ。学校からの帰り、歩道を渡っていた僕に信号無視をしたトラックが横からぶつかったらしい。数メートル吹っ飛ばされて、そのまま動かなくなったという。他人事のように聞こえるかもしれないが、実際その時の記憶がないのだからそれが自分の経験だという認識が持てない。そしてトラックの運転手はそのまま逃げた。余談だが、数キロ離れた場所でその運転手らしき人物は自殺をしたという話だ。別に興味はないが、驚くべき事に、僕は無傷だった。ただ意識を失ってから二週間が経過していた。それだけで済んだのは奇跡だと口々に言われた。そんなことはどうでもよかった。ただ、目覚めた時にいた彼女を悲しそうな表情にさせてしまったことに対する罪悪感ばかりが僕を苛んだ。

次の日彼女は来なくて、一日中検査ばかり受けた。それでもどこにも異常はなく、僕は退院出来ることになった。

「翔……。」

彼女は病院の入口で待っていてくれたようだった。僕が彼女に気付かずに出ていこうとすると、あの時のように僕の名前を呼び、あの時のように僕を抱き締めた。それがなんだか恥ずかしくて嬉しくて、それに答えてあげられない自分が悔しくて悲しくて、初めに言わなければいけない言葉はやはりこれだと思った。

「じゅん。」

彼女は僕の目を見ずに、小さな僕の中でひとしきり声を殺して泣く

と、僕の手をひいて病院を出た。空は晴れ渡っていて、それは彼女の涙を無力な僕の代わりに消し去ってくれそうな気がした。

多分それがおそらく、

彼女の見せた、最後の弱さだった。

街は昨日降った雪で白く染まり、稚拙な表現になってしまいが、まるで僕の心みたいだった。積もった雪だけならば、滑って転ぶ危険性は少ない。だが、一度溶けかけて固まり、その上から少し雪が降った状態は非常に危ない。頭では理解していた。それでも何度も転びかける自分を、彼女はしっかりと支えてくれた。彼女はコンクリートの上を歩いているかのように、普通に歩くことが出来ている。それが不思議でならなかった。

「よくそんなに普通に歩けるな。」

彼女は一度ふふつと笑った。

「何バカなこといつてるの？今までは翔も普通に歩いてたじゃない。」

「そうなの？」

「そつだよ。」

それがきつかけとなったのか、彼女は僕に様々な話を話し出した。学校の事、部活の事、友達の話、そして僕の話。僕は記憶を失った訳ではなかったが、まだ多少整理がつかない所があった。僕は何を話せば良いのかわからなかった。彼女の話の話を聞くばかりであっ

た。大切なのは話の内容ではなく、話をしているという事。言葉を交わすことで、互いの中の互いの存在をより明確なものにしようという彼女と僕の思いは、多分間違っていない。

いつか大切にしていこうとする時間は今ここにあってもいいと、そう思った。だからこそ、僕は知らなければならぬことがあった。

「あのさ、…」

「何？」

「あの…」

名前を教える欲しい。それほど重く、残酷な言葉は他にあるだろうか。それは彼女との時間を否定する事になる。今この時も、そして昔も。それは全てを壊してしまう呪いであり、僕と彼女を結び付ける絆を形にする魔法であった。彼女を見たときに思い浮かんだ名が彼女の名でないのだとしたら、僕は彼女の本当の名を知らない。いや、覚えてない。この責め苦はなにかの罪なのだろうか。それともそれ自体が罪なのだろうか。

「玲奈だよ」

彼女は少し前を歩きながらはつきりとそう呟いた。僕の罪は、彼女にその名を言わせてしまったことなのだろうと思った。

「いいんだ、今まだ、それだけで。」

「あ…」

「あそこの店のケーキ美味しいんだよ。食べにいく？お腹もすいたし。」

僕の手を引く彼女の小さな手が、少し震えていたのは寒さからだろ
う。そう思うことで、逃げようとしたのは僕の弱さだった。かける
べき言葉があった。伝えるべき思いがあった。述べるべき事実があ
った。結局何一つできぬまま、僕は彼女の強さに甘えた。彼女は強
い、僕は弱い。だからこれから強くなる。彼女より強くなって、
彼女を守るように。

「太るよ。」

でもそれは間違いだった。人間は弱いものだから。

「私は大丈夫だもん！」

僕の手を握る力が強くなった。痛いくらいに。だから僕はより強く
その手を握り返した。

だからせめて強くあろう。繋いだ手から伝わる思いに、僕は決意で
答えることにした。おそらくこの決意は彼女には届かないだろう。
今はそれでもいいのだ。必要なのは手をつないでいくであろう時間。
それはこれから紡いでゆくことのできる二人の軌跡。この手はその
始まりだった。

そうなるはずだった。

瞬間、僕は手をふりほどいていた。

彼女はそこにいた。

気付かなかった。赤みがかった白髪で、薄汚い紅い布を身に纏った彼女が、その存在があまりにも異質で、異常で、そして自然だったから。周りの人は、彼女を見ていない。見えてすらない。人ばかりではない。動物も、虫も、風も、音も、時間や、空間ですら彼女を拒絶している。おそらく世界が彼女を否定している、そんな気がした。それでも僕だけに彼女は見えた。背後に紅い宝石を散りばめながら、片足を引きずり歩いていく。彼女の横顔は、眠っていた時の僕の顔に似ているのではないか。それに気付いてしまった。だからこそ、僕は彼女惹かれた。夢中になったと言い換えてもいい。夢の中のあの声が、彼女だという確信はない。ただ、今感じているこの気持ちそのものは確かなものであると思ったから、僕は彼女の元へ駆け出した。

「行かなきゃ……」

「翔!!」

背後から聞こえる声は、最後のチャンスを与えてくれた。一度手を話した僕を、離れていこうとした僕を、それでもまた呼んでくれた。これで2度目だな。彼女は優しい。僕は彼女の元へ戻るべきなのだろうか。今確かにある彼女との未来を、今度は彼女の為の未来を、僕は歩まなければいけない。だって、彼女は僕にとって大切な人だから。

でも、それでいいのだろうか。紅い髪のある人がもし僕を呼んでくれた人なら、僕は確かめなければいけないことがある。おそらくもう二度と彼女とは逢えない。それだけはわかる。その先に何かあるだろうか。希望と不安、現実と虚構。どちらを大切にするか。悩んでしまう僕は残酷だろうか。時は待ってくれない。どちらとも失うくらいなら、片方を選び、そして罪を背負おう。だから僕は…

振り返らずに駆け出した

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1334j/>

天使の慟哭

2011年1月26日11時31分発行